財団法人 日本ハンドボール協会編　平成21年11月1日発行(毎月1回1日発行)　通巻505号　昭和40年6月7日第3種郵便物認可

ハンドボール

特集
第38回全国中学校大会
男子代表、欧州遠征報告

11

NOV.2009・No.505



[表紙写真：第38回全国中学校大会・男子優勝のはとり中学・笹川選手：写真提供・スポーツイベント社]

財団法人 日本ハンドボール協会
http://www.handball.jp/

創意工夫・一致団結



(財) 日本ハンドボール協会常務理事　**伊藤 宏幸**

過密スケジュールの夏期大会も無事消化され、日本リーグが開幕、そして新潟国体、全日本総合選手権といよいよ2009年度も終盤を迎えつつあります。小生も７月には福島県本宮市で開催された全国クラブ選手権大会（東地区）で審判審査委員の一人としてＡ級審判員の審査、協会役員として表彰状授与等を担当して参りました。

８月は休暇を利用しプライベートで愛知県豊田市で開催されたマスターズ大会、京都でのインターハイ等を見学させて頂きました。どうしても大会役員で行くと、本部席を離れる事が出来ず、観客目線を忘れがちになってしまいます。観客席に身を置きながら、観客や選手、スタッフの生の声を聞く事で、更に様々な課題が見えて来る事があります。

そういう意味においても、時間を惜しまず現場に出て実際に肌で感じることができる時間を持つことが必要だと考えております。

さて、この号が発刊される頃には2016年のオリンピック開催都市も決まっていることと思いますが、誘致結果に左右される事無く、日本協会としての課題を着実に一歩ずつクリアして行くことが、重要であると考えています。

総務本部としては、年度当初に掲げた下記テーマをベースに各委員会を中心に地道な活動を推進しています。

総務：事業を滞りなく実行するための諸施策の推進
国際：アジアハンドボール連盟との和解合意に基づいた「アジアの正常化」「アジア地域の発展」をベースにした行動の展開
広報：「ハンドボール競技の注目度の更なるアップ」を踏まえた広報活動計画
財務：日本経済の厳しい環境を踏まえた財務内容の改善と適切な配分

とりわけ財務面では、昨秋からの世界不況の中、一部には景気感が戻って来たと言われているものの、それを我々が感じるまでには、まだまだ至ってないようです。そういう中で常日頃から選択と集中を心がけ、節約に知恵を絞って頂いているのが現状だと思います。

川上専務理事も「お金が無いから何も出来ないと考える前に諸先輩方が創意工夫でこつこつと発展させて下さった努力と行動を、今一度振り返り、それを鏡にハンドボール界全員のチームワークで乗り切りましょう！」と機関誌に掲載されていました。

まさにその通りであると思われます。日本ハンドボール界全体が一致団結し、まずはロンドンオリンピック出場を果たすべく、それぞれの役割を再認識し、ベクトルをきっちりその方向に合わせて行きましょう！

第38回 全国中学校ハンドボール大会

【最終順位】

	<男子>	<女子>
優　勝	はとり中学校（愛知県）	光陽中学校（福井県）
準優勝	明倫中学校（福井県）	大住中学校（京都府）
第3位	三松中学校（宮崎県）	氷見北部中学校（富山県）
第3位	岩国中学校（山口県）	神森中学校（沖縄県）

全国大会を終えて

(財) 日本中学校体育連盟ハンドボール専門部競技部長　石塚 廣一

第38回全国中学校ハンドボール大会は、「夢を追い 九州で輝く 華となれ！」のスローガンのもと、8月22日から4日間の日程で、宮崎市総合体育館・他において中学校チャンピオンを目指す男女各20チームによって、熱戦が展開されました。

「健やかな体つくり」の要素である体の面のみならず、顧問として携わってこられてきた先生方の情熱とその信条が、21世紀を担う豊かな心づくりにも貢献されていたと思われます。大会会場での横断幕やゲーム中の指示の声かけの中にも、技能に裏付けされている心の指導の重要性が感じられました。そんな全国の厳しい予選を勝ち抜いてきた精鋭とあって、その日頃のチーム指導の姿勢が会場での保護者や観戦状況のマナーの良さという面にも良い影響を及ぼしていたかと思います。また、折しも新型インフルエンザ騒動の最中の運営となり、緊急に対策本部を設置、迅速な対応体制の整備を整えたことにより事なきを得て、大会を無事終えることができました。

さて、今大会を振り返りますと、男女ともに接戦のゲームが多く、3・4点差以内のゲームとしては男子が8試合、あきる野西中（東京）対朝明中（三重）、培良中（京都）対滝尾中（大分）、氷見南部中（富山）対葛西第三中（東京）、香川第一中（香川）対朝明中（三重）、住吉中（山口）対平針中（愛知）、住吉中（山口）対明倫中（福井）、岩国中（山口）対浦西中（沖縄）、明倫中（福井）対はとり中（愛知）、女子が6試合、浦西中（沖縄）対久保中（山口）、本通中（北海道）対三松中（宮崎）、大住中（京都）対三郷北中（埼玉）、大瀬中（奈良）対鬼怒中（茨城）、香川第一中（香川）対東久留米西中（東京）、氷見北部中（富山）対大住中（京都）など同じ学校が度々出てくるところや、男子の決勝戦は大接戦からも、全国大会としてそれぞれのブロックでの技術・戦術の差がなくなってきていると思われます。そんな中でも特筆すべきゲームは、男子の決勝戦にて前・後半ともに最後の最後まで息詰まる熱戦ぶり、また地元出場枠として男子の三松中が最終日の準決勝にまでコマを進めたことが、大会を大いに盛り上げてくれる要因にもなっていました。選手・監督・コーチのみなさん、おめでとうございました。

現代のハンドボールでは、スピード・テクニック・スタミナの要素が問われ、大変レベルも上がってきています。今大会の中から将来的にオリンピックや世界選手権といった国際的に活躍する選手が多数現れてくれることを祈ります。

終わりに、本大会を開催するにあたり、多大なご指導・ご支援を賜りました関係諸機関・団体役員の先生方、地元の宮崎県実行委員会・中体連、生徒役員の皆様の心のこもった大会づくりと運営ぶりに深く感謝申し上げ、総評と致します。地元の中学生による誠意のこもった運営ぶりは、夏の暑ささえ忘れさせてくれる爽やかさを大会に振りまいてくれていました。誠にありがとうございました。九州ブロック大会・会期最終種目として、見事に九州の華となった大会でした。








6点すべて　写真提供：スポーツイベント社

男子優勝：はとり中学校（愛知県）

はとり中学校ハンドボール部監督　**深見忠司**

この度は、平成21年度全国中学校体育大会・第38回全国中学校ハンドボール大会において優勝することができ大変嬉しく思っています。これもひとえに、ご支援、ご協力いただいた学校関係者の方々、保護者の方々、愛知県、そして名古屋市の先生方のおかげであると深く感謝しております。

春の全国大会では、優勝という最高の結果を納め、新聞や雑誌にはとり中学校ハンドボール部が取り上げられ、私が思っている以上にハンドボール部を取り巻く環境が一変しました。それと同時に、「日本一」という肩書きを背負ってプレーする重圧とも戦っていかなければいけないという実感も湧きました。ただ、登録チーム数が全国一多い愛知県で、もう一度全国大会へ出られる保証はなく、名古屋市の春季大会では、一緒に全国大会に出場した平針中学校との決勝戦では1点差でなんとか勝利するなどレベルの高さを実感し、「もう一度日本一へ」と生徒と共に目標をたて、夏に向けてトレーニングを始めました。

春の全国大会では、DFというよりもOF重視のチームづくりを考えましたが、夏はOFだけでは乗り切れないと、DFを含めたトータルバランスを考えました。OFが大好きな生徒たちにとっては、DFは地道な作業の繰り返し、下半身強化から苦しい練習にも歯を食いしばって頑張る姿が多く見られました。

その成果もあり、名古屋市・愛知県・東海大会と徐々にチームのバランスもよくなり、心技体ともにすべてをそろえて全国大会にのぞめたと思っております。

ただ、やはり楽な戦いはなく2回戦の井吹台中学校の粘り強いDFに苦戦し、3回戦では、春の全国大会の決勝戦で戦った神埼中学校に前半途中から5点差にされ、そこからよく追いつけたと思います。準決勝では、岩国中学校。バランスがよく最後まで苦しめられました。そして、決勝戦の相手は明倫中学校。昨年度の優勝メンバーが残り、小学校からの経験も豊富。また、練習試合でもほとんど勝ったことがない…試合が始まる前、生徒たちに「絶対に離されないようについていくぞ！　絶対に諦めるな！」と檄を飛ばしました。その気持ちが届いたのか、フォーメーションを駆使しながら何とかついて行くことができ、後半の途中で追いついたときは「絶



写真提供：スポーツイベント社

対に勝てる！」と生徒を信じました。そして…タイムアップ！勝利の瞬間をむかえることができました。

最後になりましたが、ハンドボールに出会い、教師になる夢をいただいた沼部先生、稲石先生、いつも先を見据えて話しをしていただける本谷先生、汐路中学校から一緒にハンドボールを指導し、教えていただいた鳥本先生、名古屋のJOCスタッフの先生方との出会いすべてに感謝したいと思います。また、ハンドボールに熱中する自分を支えてくれている妻に感謝したと思います。

はとり中学校ハンドボール部主将　鬼頭篤史

平成21年8月22から25日にかけて行われた第38回全国中学校ハンドボール大会に出場し優勝できたことをとてもうれしく思います。優勝できたのは、深見先生、コーチ、保護者、周りの方の協力や応援、はとり中学校ハンドボール部にかかわるすべての人たちのおかげであり、とても感謝しています。

春の全国中学生ハンドボール大会が終わり、頂点に立った僕たちは追われる立場となりました。目指す目標が頂点しかなくなった僕たちは「もう一度日本一へ」というスローガンを掲げて、再びハンドボールにすべてを捧げていきました。練習はとてもきつく、九州勢にも走り負けないように、死ぬほど走り抜きました。そんな厳しい練習をやり遂げることができたのも仲間がいたからこそだと思います。倒れそうになっても仲間が声をかけてくれたり、メンバーから外れた仲間や後輩たちが全力でサポートしてくれたりしたので、最後までやり遂げることができたと思います。僕は、こんなにもすばらしい仲間に出会えたことを誇りに思います。

厳しい練習を日々積み重ね、いよいよ大会が始まりました。こんなにもすばらしい環境の中でハンドボールを楽しめることに、幸せを感じ、伸び伸びプレーすることができました。一戦一戦どの試合も気を抜ける相手ではなかったけれど、深見先生や仲間、今までやってきたことを信じてチーム全員で最後まで戦いました。その結果がこの優勝という形で終われたことを、とてもうれしく思います。

優勝した瞬間は今までの苦しかったことを思い出し、自然と涙が出ました。そして、深見先生に心から感謝したいと思いました。ハンドボールのことだけでなく、人間としても成長させていただいた深見先生に本当に感謝したいと思います。また12月に行われるJOC大会にも出場して、3冠を目指し再び走り出したいと思います。

女子優勝：福井市光陽中学校（福井県）

光陽中学校女子ハンドボール部顧問　高野郁代

あきらめなければ夢はかなう！

平成21年度全国中学校ハンドボール大会におきまして、優勝できましたことを大変嬉しく思っています。これもひとえに、日頃よりご支援、ご協力いただいた学校関係者の方々、保護者の方々、そして県ハンドボール協会、先生方のおかげであると深く感謝しています。本当にありがとうございました。

昨年度は、地元福井での全国大会でしたが準優勝に終わり、大変悔しい思いをしました。

思えば閉会式が終わって学校へ戻った時、どん底の自分を救ってくれたのが今の3年生でした。「来年こそは先輩達の分も日本一を目指すので、お願いします」と言ってくれたその一言が、私にもう一度パワーを与えてくれたのです。あの日から1年間、悔しさをパワーに変えて、どんなに苦しくて



写真提供：スポーツイベント社

もあきらめずに生徒たちは厳しい練習に明け暮れました。

今年も昨年同様、長身選手に恵まれた大型チームになりましたが、去年との違いは動ける大型チームを目指したということです。特にディフェンス面に時間をかけて、失点を少なくして速攻で得点できるように意識しました。今大会は特に昨年から試合に出場していたキャプテンの川﨑彩花と永田美香の２人が、チームを引っ張りました。川﨑のうちに秘めた思いはチームの原動力にもなり、今大会での勢いは常に彼女の先取点でした。初心者の永田はオリンピック有望選手に選ばれており、178cm の長身を生かしたディフェンスは、チームの要として数々のピンチを救いました。昨年の立っているだけのポストから動けるポストに成長した彼女の働きが今年のチームには欠かせないものだったと思います。また、サイドの左利き田中里佳も初心者ですが、真面目な練習態度で 169cm の身長を生かしたダイナミックなサイドシューターになりました。重久未佳も 167cm と腕の長さを生かしたシュートで、今後ますます伸びていく要素をもっています。２年生の木村有沙は抜群のスピードとセンスで、チームのバランスをとることができました。サイドの３年生奥村朱実は、脚力を生かし走ってくれました。GK の２年生山本佳子は、２回戦のアップでボールに乗り、捻挫をしながらも大事な場面でチームを救ってくれました。控えの３年生、ピンチを救ってくれた GK 橋本咲希、見えないところで努力をしていたサイド岡田春香、チームのために盛り上げ役や仕事をしてくれたポスト片川紗知を加えて、「チーム光陽」はより一層厚味が加わりました。GK の捻挫というアクシデントや組み合わせ、会場の暑さ全てがかえってチームの結束力を強め、全員で「日本で笑えるたったひとつのチーム」を勝ち取ったのだと思います。この優勝を長年心待ちにしてくださった光陽地区のハンドボール関係者の方々、この優勝が少しでも恩返しになったら嬉しいです。

最後になりましたが、今大会で運営にあたられた大会関係者のみなさま、影で支えていたさわやかな中学生のみなさん、そしてこの場をお借りしてピンチを助けてくださった香川第一中の平野先生、トレーナーの田中さん（高松大学）に心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

光陽中学校女子ハンドボール部主将　川﨑彩花

８月 23 日から 25 日まで宮崎県で行われた全国大会。私たちはここで、念願の全国制覇をはたすことができました。昨年は、決勝までのぼりつめながら悔しい思いをしたので、「日本一」になった瞬間は、これまでに味わったことのない感動で、涙が止まりませんでした。

しかし、それまでの練習はとてもつらく、自分の気持ちに負けてにげだしたくなることもたびたびありました。でも、仲間を信じてはげまし合いようやく全国大会への切符を手に入れることができました。

宮崎県の会場は、福井と違う暑さで不安もありましたが、常に自分達のために動いてくれた後輩、家族、先生のおかげで気持ちよく試合をすることができました。周りでも支えてくれる多くの人達のためにも頑張らねばならないと改めて感じ、選手の団結力もいっそう強まりました。２回戦からの出場で暑さとの戦いとなり、なかなか思うように身体が動かず、立ち上がり苦戦しました。しかし、その後の試合は自分達の持ち味であるディフェンスと速攻が決まり、最高の試合ができたと思います。

緊張と不安の中、私達の心の中に常にあったのは、先生がいつもおっしゃっている「お前達は日本一練習してきたチームだ」という言葉でした。形勢が不利な時でもその言葉のおかげでみんなが自信をもって戦うことができました。「全国制覇」という最高の宝物をとれたのも、支えてくださったいろいろな方々のおかげです。それらの方々に優勝という報告ができたことはとてもうれしく思います。この一生の宝物を胸に、これからさまざまな壁にぶつかった時も、全力で突き進んで生きたいと思います。本当にありがとうございました。

日本代表男子海外遠征（フランス・デンマーク）報告

日本代表男子：2009 フランス・デンマーク欧州遠征から

日本代表男子監督　酒巻 清治

8月7日から24日までフランス南部プロバンス地方並びにデンマーク・ホーセンス地区に強化遠征を行いました。来年2月に予定されている世界選手権スウェーデン大会アジア予選を勝ち抜くため世界の強豪を相手に現在の自分たちの「立ち位置」を把握すべく、16日間11試合を消化しました。

対戦チームはいずれも強豪チームであり、中でもフランスではモンペリエ、デンマークではBSKシルケボリなど、シーズン直前の「ベストコンディション状態」かつフランス代表カラバティッチ、スロベニア代表カプトチニック、デンマーク代表ニールセン、元代表イエペセンなど世界のトッププレーヤーとの対戦に心を高ぶらせていました。

8月7日にマルセイユ空港へ到着後宿舎となるイストルスポーツセンターへ移動。南フランスプロバンス地方独特の陽気な気候とは裏腹に我々スタッフはある意味の「覚悟」をしなくてはなりませんでした。この時期に各国クラブチームとの対戦は本当に久しぶりで、前述したように代表クラスが顔を並べるいわゆるマルチナショナルチームとの対戦は、我々の「立ち位置把握」などという甘さは通用しない相手だと認識していたからです。

今回の遠征の目的は以下の通り設定しました。

1）遠征の活動を通じて

午前トレーニングと夕方のゲームを連日行なう中で、個人のコンディションをキープできるかどうか。練習→食事→休養の原則をもとに普段とは違った環境下でも柔軟に対応し常にベストパフォーマンスを発揮できなければならない。

2）個人並びにチームパフォーマンス

[ディフェンス]

・６：０DFにおいて大型ラインプレーヤーをいかに抑え込むことができるか。

・チームディフェンスにおける各ポジションの「約束事」を徹底できるか。

[オフェンス]

・攻守の切り替えを素早くし、マークミスや数的有利な状況を狙うことができるか。

・上記の状況を確実にゲットできるか。

・上記の状況を造り出すために個人のパフォーマンスを効果的に活用しているか。

<フランスシリーズ>

トレーニングマッチということもあり、全てのチームがクイックスタートを多用してきた。各対戦チームの徹底ぶりは見事であった。日本代表の長所である「スピード」が今や世界のトップクラスでは「当たり前」のパフォーマンスになりつつある。

ディフェンスではボディーコンタクトのハードさに「差」が見られた。

<デンマークシリーズ>

フランス同様攻守の切り替えが早く、それに伴いパスワークが速い。

防御→速攻→攻撃→戻りのなかで特に「速攻→攻撃」が非常にスムーズに行われ、フリースローで相手の攻撃を中断しなければ、傷口が広げられてしまう。

ディフェンスはフランス同様ハードコンタクトであるが、日本人選手たちが慣れてきたせいもあるのか、１：１の局面で勝つケースが多く見られた。

3）総括

スピーディな攻守の切り替えが行われる中、より基本に忠実かつ正確なプレーを実践しているかで勝敗が決まってしまう。もちろんその中で様々な個人・チームの戦術が存在しているのは間違いないが、今回の遠征で訪れた国がひとつは世界チャンピオンもう一つは欧州チャンピオンであることから考えるならば、「世界のトップ」がいかに真剣に日々のトレーニングにおいてそれらを追求しているかがうかがい知れる。

20年間オリンピックから遠ざかっている我々ではあるが、目指す姿勢は常に

（より「強く・速く」）×正確かつ基本に忠実

＝ハイクオリティーハンドボール

あらためて突きつけられた「現実」である。

4）今後の強化

シーズンスタートにともない、メンバーの洗い直しと10月・11月に短期間の合宿。

12月全日本総合終了後、年末までの強化合宿を経て1月初旬にロシア代表との合同合宿。2月予選前に欧州にて直前合宿を実施し、本大会に臨みます。

ロンドン予選に向けて世界選手権出場は必要不可欠であります。現在日本が有する最高の戦力を持って闘いたいと思います。引き続き絶大なるご声援を頂きます様、この誌面をお借りしてお願い申し上げます。

試合結果

◆8/9（日）
日本代表　23（11-17, 12-15）32　Nimes（フランス）
フランス遠征の初戦、対戦するチームはフランスリーグ1部の中位に位置するNimes。

前半、日本は河瀬・藤田の連続得点で幸先の良いスタートを切る。しかし、5分過ぎに日本は退場者を出すと連続失点で4対4の同点に追いつかれる。2m級の選手が3名いる高いディフェンスに対してオフェンスでリズムをつかむことができず、4連続失点で4対8とリードされてしまう。その後は武藤、高智らの得点で加点するが前半終了間際にも連続失点を許し、前半を11対17で折り返す。

後半、リズムをつかみたい日本は高智の連続得点で13対18。6分には末松の速攻が決まり16対21。少しずつ点差を縮めて行きたい日本は、メンバー交代を機に相手のディフェンスを崩したいところだが逆にオフェンスでミスが発生、逆に相手に速攻を許し連続失点などで23対32でタイムアップ。オフェンス・ディフェンスでの課題が浮き彫りとなった試合であった。

◆8/11（火）
日本代表　36（18-11, 18-11）22　イングランド
20分ハーフの変則マッチ。第1戦はイングランド代表。2012年のロンドンオリンピック開催のため"ジャイアントプロジェクト"として、各競技から大型選手を集め強化しているイングランド。先に地元モンペリエと戦っているイングランド代表はすでにスタミナ切れの状態。先制点は奪われるものの崎前・前田・新らの連続得点で4対1とリード。その後も武田の連続ミドルシュート、前半終了間際にも武藤・新の連続得点で前半を18対11で折り返す。

後半も単調となったイングランドの攻撃をアグレッシブなディフェンスでミスを誘い、猪妻の速攻や門山のカットイン等で得点を重ね、7分過ぎには25対13とほぼ試合を決める。足が動かないイングランドはラフプレーが目立ち、後半だけで7人の退場者を出す。その間も、広くなったディフェンスを末松が鋭いフェイントからシュートを決めるなど36対22で快勝。日本のスピードが目立った試合となった。

日本代表　18（6-12, 12-15）27　モンペリエ（フランス）
20分ハーフの変則マッチ。第2戦は地元・モンペリエ。昨シーズンのリーグチャンピオン、フランス代表のカラバティッチ選手等が所属。

試合開始直後から武田が積極的にミドルシュートを狙っていくが、モンペリエの高いディフェンスにゴールを奪うことができず0対2とされる。しかし横地のステップシュートが決まると、速攻から河瀬が得た7mスローのチャンスを末松が落ち着いて決め、2対2の同点。モンペリエが退場者を出し、ここで波に乗りたい日本だが、簡単なパスミスなどがから逆に3連続失点で2対5とされてしまう。中盤以降も高智・岸川らのミドルシュートが決まるものの、パスミスなどで自らチャンスをつぶしてしまい、前半を6対12で折り返す。

後半、GK松村が連続セーブでディフェンスを盛り上げ、豊田の7mスロー、ミドルシュートなど3連続得点で反撃を開始。しかし、前半のミスがひびき、なかなか得点差を詰めることができず、18対27でタイムアップ。動きのスピードに頼りすぎ、パスの精度を欠く試合となった。

◆8/12（水）
日本代表　30（15-16, 15-16）32　Provence（フランス）
フランスリーグ2部・優勝チームプロバンスとの対戦。

試合開始直後、ミスから先制を許し0対2とされるもののすぐに猪妻の7mスロー、武藤のポストシュートで同点に追いつく。中盤も新のスカイプレーや、武田のミドルシュートなどが決まり、13分で8対8の同点。15分からほとんどの選手を入れ替えると、交代して入った豊田・門山の連続得点で10対9と逆転。ここでリズムに乗りたい日本だが退場者を出してしまい、その間に12対13と逆転されてしまうと前半は15対16の1点ビハインドで折り返す。

後半、前田・武藤の連続得点で17対16。7分、相手に退場者がでると、一気に5連続得点で23対20。GK高木の好セーブもあり、点差を広げるチャンスだったがオフェンスでのミスが続き、27対29と再び逆転されてしまう。その後、岸川・崎前の連続速攻、GK高木のノーマークシュートセーブなど、30対29と1点リードするが、試合終了間際にもミスがあり、30対32で試合終了。点差を広げられるチャンスに自らのミスでリズムを崩してしまった。このような試合を勝ちに持っていくことが今後のチームの課題となりそうだ。

◆8/13（木）
日本代表　28（10-14, 18-11）25　ISTERS（フランス）
各国の代表候補選手をずらりと揃える地元のイストル。昨シーズンのフランス選手権（全日本総合選手権と同様の大会）の優勝チームである。

立ち上がり、相手のエースのミドル、ポストと連続失点で0対2とされると、6分過ぎにも3連続失点で3対6とリードされる。日本は高智・武田の速攻で6対7と1点差に追いつくが、18分、退場者を出してしまうと4連続失点で7対12と5点差をつけられる。その後、新・末松・武藤の3連続得点で10対12とするが、前半終了間際にも連続失点で10対14と4点ビハインドで折り返す。

後半、谷村が豪快なミドルシュートを決めチームを盛り上げると豊田・崎前・門山の3連続得点で14対16の2点差に。中盤、両チームとも退場者を出し、得点の奪い合いとなるものの徐々に当たり慣れしてきた選手は、疲れの見える相手に対し積極的なディフェンスでミスを誘い、新・猪妻らが速攻で得点を挙げる理想的な試合を展開する。残り5分を切り、末松のサイドシュートで25対25の同点に追いつくと、武藤のポスト、猪妻の連続サイドと4連続得点で28対25とし、逆転で勝利をおさめた。

高さと重さを兼ね備えた相手に対して、当たり負けすることがなくなってきた。これまでのフィジカル・ラントレーニングの成果が少しずつ出てきているように思う。明日のアルジェリア戦も同様の戦いを期待したい。

◆8/14（金）
日本代表　23（12-12, 11-13）25　アルジェリア
仮想中東として戦ったアルジェリア。立ち上がり、アルジェリアの高いディフェンスに対して連続ミスで0対2とされるが、GK高木の連続セーブにも助けられ、岸川・新らの得点で6分には4対3と1点リード。中盤は両チームともオフェンスでのミス

が目立ち、12分で5対5とロースコアの試合展開。19分、アルジェリアが退場者を出すと高智の連続得点で8対7と1点リードする。このまま勢いに乗りたい日本だったが、23分に日本が1人退場する間に連続失点を許し、前半は12対12の同点で折り返す。

後半も立ち上がりにミスから連続失点で13対15と2点差。7分にはアルジェリアに退場者があり、絶好のチャンスを迎えるが、ミスから逆に失点を重ねてしまい反撃の機会を逸してしまう。しかし、岸川のカットインや末松の連続得点で昨日と同様の追い上げ態勢に入る。残り5分を切り、岸川のミドルシュートで22対23の1点差まで追い上げる。さらに残り2分を切り、末松のミドルで23対24と再び1点差にするが、最後の1本を守り切れず、アルジェリアにミドルシュートを決められ、23対25でタイムアップ。何度もあった反撃のチャンスを自らのシュートミスで潰してしまう試合になってしまった。

フランスでの試合は2勝4敗に終わったが、デンマークでの奮起に期待したい。

◆8/18（火）

日本代表　33（16-18, 17-21）39　GOG（デンマーク）

デンマークへ移動しての初戦。GOGは前回のデンマーク遠征時にも対戦した強豪チーム。デンマーク・ノルウェー・アイスランドの各国代表選手を揃え、なかでもノルウェー代表選手は身長2m。立ち上がり、シュートミスからの失点で0対2とされるが、前田・猪妻が得点し、4分で2対3。相手の激しいディフェンスで日本はオフェンスミスを速攻に持ち込まれ5連続失点で2対8となると、日本はタイムアウトを請求し、立て直しを図る。前田のミドルで1点を返すものの、再び3連続失点で3対11と8点差をつけられる。しかしフランスでの試合と同様に10分を過ぎ、相手のペースがゆっくりになり始めると日本の速いプレーが効果的に決まる。14分、門山・横地の連続得点などで徐々に点差を縮めていく。23分に相手が退場すると、高智・小澤の連続得点で12対17。終了間際に猪妻・岸川の7mスローなどが決まり16対18で折り返す。

後半、岸川・豊田の連続得点で18対18の同点に追いつくとGK坪根の好セーブもあり反撃のチャンスをつかむが、逆転することができない。中盤以降、デンマークから合流したGK浦和、小澤・地引らの活躍もあったが要所でのミスがひびき、33対39でタイムアップ。残り4戦も強豪チームとの対戦が続くが、今までトレーニングしてきた成果が出せるよう、試合に臨みたい。

◆8/19（水）

日本代表　24（14-17, 10-20）37　BSV-Silkeborg（デンマーク）

デンマーク2戦目。Silkeborgはデンマークエリートリーグ（日本リーグ1部に相当）で常に4強に入る強豪チーム。スウェーデン代表GKをはじめ、スイス、ギリシャ、セルビア、デンマークなど各国代表選手が所属。

今遠征中、立ち上がりでリズムを崩されるケースが多いが、今日の試合もシュートミスから失点し、10分で3対7とリードされる。中盤は豊田・猪妻・高智らが得点をあげていく。20分過ぎ、新・高智・小澤ら若手選手の連続得点で10対14と点差を少しずつ詰めていき、終了間際にも横地の連続得点で14点目を上げ、14対17と前半は3点差で折り返す。

後半、立て直しを図りたい日本だが連続ミスから3失点し14対20。門山・岸川・高智らの体を張ったプレーで得点していくが、残り10分を切ってからもミスからの失点があり、24対37でタイムアップ。

オフェンスではパス回しから良い形まで持っていくが、最後の判断ミスやシュートミスにより失点するケースが多かった。

◆8/20（木）

日本代表　29（12-9, 17-11）20　Ribe（デンマーク）

デンマーク3戦目。Ribeは昨年度、デンマーク2部の1位。前日に出た課題を午前中のトレーニングで確認し、試合に臨むと足がよく動き、パス回しも早くなり新の連続得点などで6分、3対3。12分、前田が7mスローを決め、リズムをつかむと19分には豊田・藤田、前田の3連続得点で9対6とリード。前半はこのリードを保ち12対9で折り返す。

後半、ミスからの失点で12対11と1点差にされるが、ここでも地引が得た7mスローのチャンスを前田がしっかりと決め、さらに岸川・猪妻の連続得点で15対11。14分にも末松・藤田・高智の連続得点で20対13とリードを広げる。その後もGK浦和のセーブから地引が速攻を決めるなど残り5分で28対18とこの日最大の10点差。この試合、前田が5本すべての7mスローをきめるなど集中力を切らさなかった日本が29対20で勝利した。

◆8/21（金）

日本代表　32（20-14, 12-17）31　HCM（デンマーク）

デンマーク4戦目。HCMはデンマーク1部リーグのトップチーム。課題だった立ち上がりはディフェンスでのコンビネーションがよく2対0とリードする。10分過ぎにもGK高木の連続セーブ、猪妻・前田・豊田の3連続速攻で8対5とする。15分にも豊田・前田・末松の連続得点で11対6とリードを広げる。残り10分をきってからも相手のミスを速攻につなげ20対14で折り返す。

後半、さらにリードを広げていきたい日本は速攻をしかけていくがテクニカルミスから加点できない。14分に相手が退場しチャンスを迎えるが逆に連続失点で25対23の2点差まで詰め寄られる。残り5分、日本が退場者を出す間に、2連続失点で30対30の同点に。さらに1点ずつを加点し、31対31の同点。

残り3秒、相手のミスを速攻につなげ、最後は新が冷静に決め32対31の1点差で勝利。またもミスからリズムを崩し、試合展開がガラリと変わってしまった。残り1戦、強化遠征の集大成として次につながる試合をしたい。

◆8/22（土）

日本代表　20（10-20, 10-16）36　AG（デンマーク）

デンマーク最終戦。AGはデンマーク1部リーグの1位。今後の活躍が最も期待されているチーム。開始20秒、末松のシュートで先制点を奪い、新のゴールで2対1とするものの、連続ミスが続き5連続失点してしまう。何とか食らい付きたい日本は早いパス回しからゴールを狙いシュートチャンスを作るがフィニッシュが決まらない。その後、前田の7mスローなどで加点するが前半は10対20で折り返す。

後半、猪妻の速攻や高智・門山らカットインなどで得点するがミスからの失点で20対36でタイムアップ。デンマークでの試合は2勝3敗で終了。

今遠征を通じて、OF・DFでの課題が明確になった。この課題を2月までに修正し、アジア選手権に臨みたい。

ドクター・水素水

特殊セラミック＆エンバランスTスティック
簡易型水素発生「生」水器（水素発生ミネラルスティック）

豊富な水素が 水を変える！

フレンディアはJADMA（日本通信販売協会）の正会員です。

JADMA
社団法人日本通信販売協会会員

健康は毎日の飲料水から…



※本製品は改良のため予告なく仕様・デザインを変更する場合があります。



500mlのお水にドクター・水素水スティック１本を投入。
約120分後、水温21度における容存水素量0.48ppm。（当社測定値）

日本医学交流協会医療団
（ＮＰＯ認証 東京都）



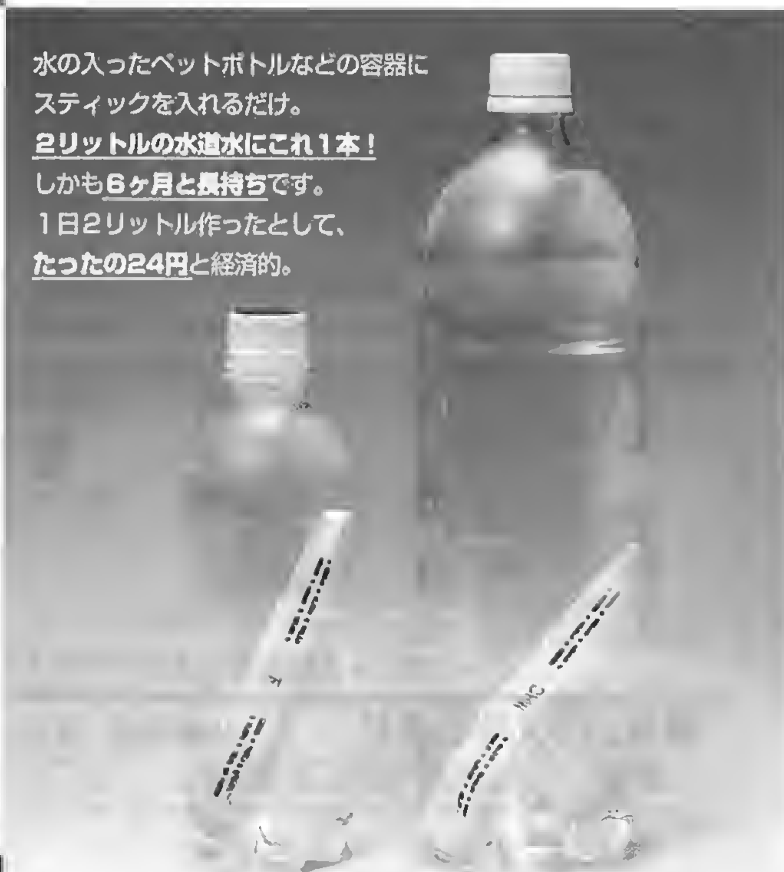
当商品は認定を受けています。
http://www.drp.ne.jp/で認定確認できます。

特許公開番号：2004-41949
韓国特許登録：529006号
米国特許番号：7189330

原材料／金属マグネシウム、天然石
サイズ／19×132mm



価格／1箱4本入り 13,440円（税込み）



株式会社フレンディア

〒107-0062 東京都港区南青山5-10-13 デコパージュ南青山4F
TEL:03-5948-5011 FAX:03-5948-5263

フリーダイヤル 0120-372-132（みんなに いーみず）

株式会社フレンディアのウェブサイトを併せてご覧ください。

http://www.dr-suisosui.com

第36回全国高等専門学校ハンドボール選手権大会

地元・八代高専が21年ぶり２度目の優勝

■最終順位　優勝　八代高専
準優勝　函館高専
３　位　北九州高専・宇部高専

大会を振り返って

八代工業高等専門学校ハンドボール部顧問　古嶋　薫

第36回全国高等専門学校ハンドボール選手権大会は、八代高専が主管校となり、八代市の総合体育館と宇城市の松橋総合文化センターの２会場で、８月21、22日の２日間を通して開催されました。八代高専が主管校となり全国大会を開催するのは、昭和63年、平成８年と平成15年に続き今回で４度目となります。これまでの大会は、熊本市内の県立総合体育館で実施されましたが、今回初めて地元八代市での開催となりました。

全国に高等専門学校は、2009年４月１日現在、独立高専機構に属する55校、公立４校、私立３校の合計62校あり、そのうち42校にハンドボール部または同好会があります。この42校の中から各地区大会（北海道、東北、関東信越、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州沖縄）を勝ち抜いた12校が全国大会に出場し、大会初日に３チームずつリーグ戦を行い、２日目に各ブロック勝者４チームによって決勝トーナメントが行われます。もともと九州沖縄地区は、ハンドボール競技が盛んなところですが、今年初めて地区内の全10高専からチームを迎え、地区大会を開催することができました。実は、私は八代高専OBで、私自身もハンドボール部に所属していました。そのころの参加数が５チームだったことを思い返すと、ハンドボール競技にたずさわる者としてはうれしい限りです。また、今では地区大会もエアコンが効いた体育館で試合をすることが当たり前のようになりましたが、私が現役の頃はそんな時代が来るとは思いもしませんでした。しかし、平成15年に本校が担当した全国大会では、会場設備の都合上、決勝戦しかエアコンを入れなかったため、釧路高専の選手が練習中に熱中症になるなど暑さ対策の必要性を痛感していました。今回はその反省も踏まえ、大会前日の公式練習日からエアコンを入れるようにしましたが、これは好評だったようです。ただ八代市で実施された他の大会と重なり、必ずしも皆さんが希望する宿舎を確保できなかったこと、宿舎から体育館が遠い上、公共交通機関の便が悪いなど、各チームの皆さんにはご不便をおかけしました。担当校としては体育館までの移動にシャトルバスを用意するなど配慮をしたつもりですが、至らぬことが多々あったことをお詫び申し上げます。

さて、競技結果ですが、昨年度と同じく函館、宇部、北九州、八代の４高専が決勝トーナメントに進出し、それぞれ宇部と北九州を退けた函館と八代が決勝に残りました。八代は前年度、優勝した函館に準決勝で終始リードをしながらも大接戦の末、逆転負けしているだけに地元でのリベンジに燃えていました。決勝戦は、昨年の試合を彷彿させる一進一退の好ゲームになりましたが、地元大応援団の後押しを受けた八代が４点差で函館を振り切り、実に21年ぶり二度目の全国制覇を成し遂げました。今年の10月に熊本電波と八代は、再編統合され新しく熊本高専となり、今回が八代高専として臨む最後の全国大会となりました。顧問としてまたOBとして、地元の皆さんに感動を与え、最高の結果を残してくれた部員のみんなに感謝したいと思います。

最後になりましたが、大会運営に当たり日本ハンドボール協会、熊本県ハンドボール協会を始め、八代市、宇城市、オフィシャルや会場準備でお世話になった有明高専ならび松橋高校ハンドボール部、本校バスケットボール部の皆様、また、ご協力頂いた全ての皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

優勝チームの声



「新たなスタート」

八代工業高等専門学校ハンドボール部顧問　四宮 一郎

「10・9・8・7…」スタンドからカウントダウンが始まり優勝を確信した時、熱いものが込み上げ、コートに立つ学生達の姿が涙のせいか滲んで見えました。21年ぶりの優勝、特に今大会は地元で開催され、八代高専として出場する最後の大会（10月1日より再編統合により熊本高等専門学校八代校に校名変更）でもあったことから、大変感慨深い大会になりました。

試合に入ると、緊張のせいか立ち上がりからリズムが悪く、後半に入ってようやく本来の力を発揮するという展開が続きましたが、函館高専との決勝戦では学生達の緊張もほぐれ、前半から自分達のプレーができたように思います。優勝という最高の瞬間にコートに立っていられたこと、昨年の忘れものを手にすることができたことは、学生達（特に５年生）だけでなく、我々顧問にとっても最高の喜びとなりました。

本校は来年度から熊本高専八代校という校名での出場となり、新しい校名での初優勝に向けて「新たなスタート」の年となります。これまでの八代高専の伝統を継承し、熊本高専八代校の新しい伝統を学生達と共に築きあげていきたいと思います。

最後になりましたが、大会開催にあたりご協力くださいました学校関係者の皆様、日本ハンドボール協会の皆様、県ハンドボール協会の皆様、そして日頃より学生達の活躍を心から応援していただいております保護者の皆様、ＯＢの皆様に深く感謝申し上げます。また、大会スタッフとして協力いただいた、有明高専女子ハンドボール部、松橋高校女子ハンドボールの皆様にも心よりお礼申し上げます。



「３つのプレッシャー」

八代工業高等専門学校ハンドボール部主将　石川 輝一

今年、八代高戦は全国高専大会において21年ぶり２回目の優勝を勝ち取ることができました。この優勝には多くの人の思いと協力が詰まっていたと思います。

今回の高専大会では、八代高専は３つのプレッシャーを背負っていました。１つ目は地元開催の期待です。地元である八代での全国大会の開催ということで、本当に多くの人が試合を見に来てくださいました。２つ目は、昨年度の雪辱です。昨年度の高専大会での成績が３位だったので、今年はさらにその上を目指そうという気持ちがありました。また奇しくも決勝戦の相手は、昨年度に敗れた函館高専だったため、雪辱を晴らす意味でも試合に向ける気持ちは大きくなりました。３つ目は、今年度で「八代高専」として大会に参加するのが最後、ということです。10月からの熊本電波高専との再編統合のため、今回の大会は八代高専の名前が残る最後の大会でした。こういったプレッシャーを跳ね除け、勝利へのバネとして感じ取れたことが優勝に繋がったと思います。そして、今回のような舞台で優勝できたことはこれからの人生においても良い経験として生きてくると思います。私は、このような経験を高専生最後の年に経験することができ、本当に嬉しく思います。

八代高専ハンドボール部はすでに新たなキャプテンを迎え、新チームとして頑張っています。新チームは私達以上の力を持っていると思うので、是非高専大会連覇を成し遂げて欲しいと願っています。

第17回 日・韓・中 ジュニア交流競技会

【最終順位】

●男子 第1位 日　本（選抜）
第2位 大韓民国（南韓高校・ナムハン）
第3位 全羅南道（開催地・務安高校）
第4位 中　国（選抜）

●女子 第1位 大韓民国（ファージ情報産業高校）
第2位 日　本（選抜）
第3位 中　国（選抜）
第4位 全羅南道（開催地・百済高校）

総評 交流を振り返り

団長 塩谷 和雄
（全国高体連ハンドボール専門部部長）

第17回を数える本競技会は、大韓民国の全羅南道木浦市において開催され、11種目239名の選手団編成により、7日間の交流事業に臨んだ。

前泊の名古屋及び出入国時や韓国における新型インフルエンザ感染防止対策は万全を期しており、選手・役員も移動時や宿舎においてマスクの着用、手洗い・うがいの励行を心がけるなど、体調の維持管理に細心の注意を払っていたのが印象的であった。こうした自己管理のもと、選手一人ひとりがチームワークとコラボレーションを重視しながら取り組んだ結果、全日程を無事終了し、別記のような戦績となった。

総体的に本国選手は体力・技術共に優れたパフォーマンスを発揮できたものと評価している。とりわけ、男子中国戦では開始早々、身長203cm・体重98kgの大型ＧＫ王選手に手こずりはしたものの、その後、各選手がタイミングや角度に工夫を加えながら、緩急に富む創造的なシュートを連発する姿は頼もしく、そのゴールシーンは圧巻であった。こうした高校生の競技レベルを維持向上させつつ、今後、高さに勝る列国と遜色なく戦い続けるためには、体位の向上と体格に優れた選手の発掘・育成が鍵を握ることは言を要しない。

選抜チームはその名の通り、全国から選りすぐった個性豊かな精鋭の集合体である。選手一人ひとりが高いプライドを有している一方、リーダーやチームメイトとのコミュニケーションなどに不安感を抱えながら、練習やゲームに臨み共同生活を営むことになる。そうした意味から、今回、監督・コーチが一体となって、選手個々の性格やプレーの見極めとコンビネーションづくりに努め、明朗快活なチームカラーの醸成に心を砕いていただいたことに、団長として敬意を表するとともに、選手の皆さんに深く感謝したい。そして、選手を派遣いただいた各校の監督並びに関係機関の皆様に心より御礼を申し上げ、交流のご報告といたします。なお、平成22年度の開催は中国の予定です。

交流競技会に参加して：男子



男子監督 國府 功
（京都府立北嵯峨高等学校、全国高体連専門部副委員長）

8月25日から27日までの3日間、韓国・木浦市において実施された第17回日・韓・中ジュニア交流競技会。高体連選抜チームとして最強の布陣で本大会に臨んだ。国体予選終了後ということもあり敗退したチームの選手もおり、悲喜こもごもの中でいかにモチベーションを上げていくかという問題を抱えての合宿スタートとなった。その中で愛知県の大同大学のご厚意により3日間の事前合宿を組むことができ、本番さながらの当たりの激しい練習試合をくり返した。それが功を奏したのか見事3連覇を成し遂げることができた。

さて、この大会は開催国韓国代表に勝ったことに大きな意義がある。各個人が役割を果たし責任を全うした結果がすべてであった。個人の技能はもちろんのこと劣勢に立たされても冷静さを失わないで過去2連覇している先輩たちに続けとばかりの意気込みは、我々スタッフにもひしひしと伝わるものがあった。「これならば」と優勝の確信を得た瞬間であった。まさに今大会のすべてであった韓国戦について書いてみると、勝因は何といってもディフェンス陣の踏ん張りである。特に後半の12分から25分までの間、あの韓国をわずか3点に抑えたことだろう。①クイックスタートをさせない。②速攻はシュートまでいく。といったチームの約束事をそれぞれが意識し確実に実行したことである。そして特筆すべきは両ゴールキーパーの存在である。好セーブを連発し積極果敢なキーピングでシュートミスを誘発し、さらには相手7ｍスローをことごとく阻止するなど神がかりとも思えるようなキーピングはすばらしいものがあった。個人名を挙げればきりがないのであえて挙げないが、全員ハンドボールとはまさにこのことである。このゲームを日本28対韓国25（前半12対9、後半16対16）で乗り切った。目指すは優勝である。次戦は、開催地代表と言ってもそこはやはり韓国、全羅南道代表も決して侮れないチームである。しかし、勢いそのままで対全羅南道代表には日本31対韓国27（前半16対

12、後半 15 対 15）で勝利を収めた。そして最終日、高さ対策を入念にして臨んだ中国戦。持ち前のコンビネーションプレー、粘り強いディフェンス力で中国を一蹴した。スコアは 31 対 16 の完勝であった。この試合は全員得点で優勝に花を添える形で締めくくることができた。

競技面などについては、公正な試合運営や親切な通訳のおかげで気持ちのいい大会であったといえる。また宿泊施設においても 1 週間という長い滞在期間中、非常に過ごしやすく、気を遣った食事など、各種大会を経験している韓国ならではのもてなしであった。

最後にフレンドシップ交流会については、各国各競技団体代表が趣向を凝らしてまさに友情の輪が広がったと思われたし、深められたと思う。ただ、苦言を呈するようだが、終了時刻が午後 11 時前という点では、いささか高校生の大会としては遅くはないだろうかと感じた。また、指導者席から見ていて、一部の日本選手団の行動には日の丸をつけた選手としての自覚が感じられないと思ったのは私だけだろうか。残念である。

興南高校　嘉数 陽介

日・韓・中ジュニアスポーツ交流競技会に主将として参加し、多くのことを学び、自分の課題も見つけました。

まず、韓国へ行く前に 3 日間の愛知合宿で行った大学生との練習試合では、DF のとき相手のブラインドや、ポストを使ったセットプレーに対応しきれていない場面が数多くありました。即席チームなので、DF の真ん中 4 人と、キーパーのコミュニケーションが十分取れていないことが要因でした。最初の合宿ではそこを克服し、チームでの意思を統一することが必要でした。

韓国、木浦での第一戦は、韓国代表チームでした。最初に実感したのは自分の体の弱さで、サイドから切り込んで相手の間を割っても、相手の当たりでシュートまでいけませんでした。相手はイエローカードをもらいはしたけれども、体幹をより備えていれば得点もできた場面でした。しかし、韓国戦での日本の DF はとても機能して、退場を出したときでもよく足を動かして粘ったことは勝利に大きくつながったと思



います。

次の木浦戦では、よくポストに通される場面が多く、日本の DF の足が止まっていたのが波に乗れなかった原因で、リズムが悪くなりました。しかし後半大事な時間帯で、相手のサイド、ポストからのシュート、そして 7 m スローをキーパーが次々に好セーブしてくれたのがその試合の一番大きな勝因だと思います。

最後の中国戦では、体の大きさで日本は劣っていましたが、DF での高い位置からのプレスと速攻で点差を離すことができたので、いい試合展開で勝てたと思います。

この 3 試合を通して見つかった課題は、即席チームでのコミュニケーション能力、体の弱さの克服、そして大事な場面で集中力です。しかし、体では劣っていてもスピード、フットワーク、シュートテクニックが通用した手ごたえもあり、大きな収穫を得ることができたと感じています。

今後の自分自身のハンドボールの目標に近づく大会にできたと思います。

桃山学院高校　山手 就策

8 月 20 日からの大同大学での合宿、韓国・木浦での 3 試合と交流会、帰国までの 9 日間は、初めて代表に加わることができ、自分にとって夢のような日々でした。

全国のトップレベルの選手たちと一緒にプレーできることを楽しみに思う反面、不安もいっぱいの心境で合宿に参加しました。練習ではチームメイトのプレーに刺激を受け、多くのことを学びました。また、ミーティングで各選手の考えを出し合い、コミュニケーションを深めることでチームが一つになっていくことを実感することができました。

韓国戦では、韓国の速い 1 対 1 やパス回しをフォローし合ってしっかり守り抜き、勝利することができました。木浦戦

では、退場者も出ましたが最後までリードを保つことができ、いろいろ不利な場面でも集中を切らさずに戦うことができたと思います。大きい選手の多い中国戦では、２m以上ある大型のキーパーに対してシュートを工夫することができたと思います。あそこまで大きなキーパーと対戦できてとてもいい経験になりました。３試合を通してキーパーのファインセーブが多くあり、それでチームが波に乗ることができたと思います。また、常にみんなが意識を統一して、お互いの良さを出し合えるムードをみんなで作っていくことの大切さをあらためて感じました。

試合後の交流会では、各国の選手の出し物を見たりして、親睦を深め、とても楽しい時間を過ごすことができました。「日・韓・中ジュニア交流会」での試合やチームメイトの言葉は、今の自分を見つめ直し、更に向上するためのかけがえのない経験として心に強く残っています。そして、とてもお世話になったスタッフの先生方をはじめチームメイト、今まで支えてくださった多くの方々に感謝するとともに、これからのハンドボールの道に生かせるように努力していきたいと思います。ありがとうございました。

交流競技会に参加して：女子



女子監督　河先　修
（栃木県立栃木商業高校、全国高体連専門部委員長）

大韓民国・全羅南道木浦市において『第17回日・韓・中ジュニア交流競技会』がおこなわれ、今回も高校選抜チームを編成し競技会に参加してきました。

4月下旬の選手選考会（大阪）において、これまでU-16やU-18で活躍実績のある選手をはじめ、各ポジション特徴のある選手を選考することができました。そして競技会直前合宿を"ＨＣ名古屋"と"少年女子愛知選抜"のご協力をいただき２泊３日で実施することができました。ここでは、国体のブロック予選を戦い終え、勝って新潟国体に行ける選手や負けて行けない選手、あるいはブロック予選をキャンセルした選手など多様な状況下で集合してきているため「選手間の温度差をなくし、一つのチームで戦う」ことを前提に最終調整をしました。進路の関係や国体ブロック大会のため全員が揃わず一抹の不安を抱えながらのスタートでしたが、チームの方向性を決めることはできました。

第１戦、韓国（ファージ情報産業高校）。第13回札幌大会の韓国代表チーム。中山（CB）・角南涼（LB）・角南唯（RB）・松村（LW）・門谷（RW）・角屋（P/OF）・一木（DF/CB）・網谷（GK）の布陣でスタート。ゲームの中盤、角南涼をポストに得点力のある安倍・渡邉・長尾、突破力のある井野・宮武らを投入していく構想でゲームに臨みました。前半15分まで韓国はロングシュートで、日本は速攻やカットインで得点し互角の展開。ロングシュートに対応するようDFをたてなおしGKを高木に交替。しかし、15分から20分の５分間で５連続失点。韓国エースに13得点、センターに10得点を奪われてしまい４点差での敗戦。GK高木の奮闘もむなしく、大量得点の２選手に絞りきれなかったDFが悔やまれました。

第２戦、全羅南道代表（百済高校）。15回桂林大会の韓国代表チーム。スタートは第１戦と同様、相手CBとポストのラインを抑え速攻で加点。相手バックプレーヤーのシュート力がなかったことや、第１戦で活躍できなかったサイドの活躍もあり９点差での勝利。

第３戦、中国選抜。170㎝を超える選手が12名（180㎝以上が４名）といつものように大型選手で構成されているチーム。第２戦までは３－２－１のDFシステムだったのがこの日は６－０に、対戦前に一線でひかれると嫌だなと思っていたことが現実に、ゲームは大型選手に打ち込まれるロングシュートを阻止できないまま、攻撃もちぐはぐな形で終始し、終盤の追い上げも大事なところでのシュートミスで勝機を逃してしまい２点差でまさかの敗戦。

最終結果は得失点差での第２位。「一つのチームで」といいつつ、最後まで一つにすることができなかったこと、個々の選手に十分な活躍の場を与えることができなかったこと、代表選手の意識付けが十分でなかったこと、何よりも勝つための指示がはっきりしなかったこと等々、チームスタッフの反省点は数多く残ってしまいましたが、選手達のこの経験が次のステップになることを願ってやみません。終わりに関係学校や保護者の方々、協会はじめ各方面の皆様のご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。

高水高校　高木 祐花

今回、この大会に参加させていただいたことは、私にとって本当にいい経験となりました。選考会を終えて、河先先生をはじめとする先生方に選んでいただいたこの年代の日本を代表するプレーヤー達でチームを作ることは、とても面白く、そして難しいことでした。

最初に名古屋のプラザー体育館で練習したときは、みんな各チームの中心的な存在であるにもかかわらず、声も小さく、

自分の良さをフルに発揮しようとしているようには見えませんでした。ですが、ミーティングを重ねるごとに、各チームの代表者の集まりではなく"ひとつのチーム"になっていったのだと思います。

初戦の韓国戦では、思ったほどの身長差もなく、左利きの選手もいなかったので、これは頑張ってひとつになってやれば勝てると思っていました。ですが、考えが甘かったです。韓国特有のフェイントのキレの良さや、大きい45°の力強く上手いシュートは健在でした。私はU-16・U-18のときから韓国の選手をライバルと思っているので、試合に出してもらったときはすごく駆け引きを楽しみながらプレーできました。私はあまり身長の高いキーパーではないので、瞬発力を活かしたダイナミックなキーピングが得意です。今回の韓国のチームは私のキーピングに合っていたと思います。

チームとしては、簡単なミスが目立ってしまい、DFでは相手エース左45°の11番の選手に対しての詰めが遅れているのを修正しきれなかったのが敗因だと思います。

どの年代の韓国も、日本選手よりもハングリー精神が強く、ずる賢いのが特徴で、それが韓国の強さなのだと思いました。

それに対して中国は、上手さやスピードは韓国に劣るものの、すべてのポジションの選手の身長が高く、日本の選手にとってはすごくやりにくいチームだったと思います。キーパーからみても、打点が高いので、ディフェンスが詰めてくれている状態でも関係なくノーマークと同じ感覚で打たれて、本当に困りました。

結果は得失点差で2位になったものの、韓国と中国に負けてしまうという残念な結果でした。しかし、私を含めたチームのみんなにとっては、良かった点、反省点、それぞれをプラスにできたように思います。

河先先生、繁田先生、塩谷部長、今回携わったすべての方はもちろん、韓国へ送り出してくれた地元の方々、顧問の先生、家族には本当に感謝しています。ありがとうございました。

夙川学院高校　渡邉 裕奈

今回、私たちは日・韓・中ジュニア交流競技会に参加させ



ていただきました。

しかし、ハンドボール競技の女子日本代表は2位という結果で、1勝2敗という成績しか残すことができませんでした。敗因はいろいろあると思います。その中で一番大きいのは一つのチームになりきれなかったという所にあったと思います。今回、韓国で交流試合をする前に、私たちハンドボール競技は愛知県で事前合宿を行いました。この合宿で監督からは「チーム内の温度差を無くし、集められた選抜チームではなく一つのチームになってほしい」言われ、事前合宿はメンバーが揃わない中での合宿となりました。一人一人がいろんな個性を持っていて、一人一人が自分に対するプライドを持っておりプレー面でも生活面でもぶつかり合うことも少なくはありませんでした。本来ならばそこでチームになりきるのならばお互い話し合うべきなのですが、他のチームの選手だから一歩引いてしまう部分が出てしまい、一つのチームとしてできあがることができなかったのだと思います。それと、一人一人の普段の生活と日・韓・中交流会での環境の変化にそれぞれ適応することができておらず、日本代表という自覚も忘れており、代表選手としての行動・言動がとれていませんでした。

私たちに足りないものは"プレーの技術やプレーを合わせる力ではなく"それ以前のものが欠けているということがこの交流試合を通して解り、また勝つためには何が必要なのかということが解ったと思います。

監督をはじめとして、いろいろなスタッフの方がいたおかげで私たちは貴重な体験ができました。このような貴重な体験を積めたことに対し、色々な方への感謝の気持ちを忘れずに、この敗戦の悔しさと経験をそれぞれの場所で活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

～地域連携へ模索～

企画・広報委員
早川　文司

Free Throw（フリースロー）

「トップス」という名称をご存知だろうか。これに「広島」をくっつけても、首をひねる人が多いだろう。正式にはNPO法人「広島トップスポーツクラブネットワーク」の略称だ。

2000年４月、プロサッカーのサンフレッチェ広島、ハンドボールの湧永製薬、広島メイプルレッズなど４競技・５クラブがＪリーグ「百年構想」に賛同、地域スポーツ振興の全国モデル地区としスタートした異競技交流団体である。

それから10年、加盟クラブは今春、プロ野球、広島東洋カープの加盟で10クラブに輪を広げてきた。

設立当初、全国の注目度は高かったが、一方で地元広島では情報発信の少なさもあって、メディアの関心、対応は決していいとは言えない面があった。

それでもクラブ間の相互応援、地域イベントへの参加、小中学生への指導などスポーツ活性化に取り組んできた。しかし、財政的な問題のほか、競技スケジュールの違いもあり、クラブ間の活発な連携、交流という面から言えば、歩みは早くないと言っていいだろう。

今回、設立10年を記念し、いっそう選手間の連携を密にし、元気な広島を全国に発信できるよう活性化を図ろうと「10周年記念祝賀会」が開かれた。“産みの親”の一人、日本ハンドボール協会の市原副会長（JOC専務理事）も駆け付け、スポーツの素晴らしさを通して地域発展に貢献しようとあいさつ。また、トップス広島理事長でバレーボールJTの山下ゼネラルマネジャーも「県・市民の宝物にしたい」とこれからの活動の意義を強調した。

問題はこれまでの反省、課題を踏まえて、どのように活性化策を推進していくかだろう。トップス自体もメディア対応の重要性を認識し始めたことはいいことだろう。ホームページのリニューアル、月間広報紙の発刊と手を打ち始め、財政面では賛助会員の募集を始めた。

最も深刻な問題は、一般への認知度をどのように高めるかである。さらに加盟クラブ選手の意識にも差がある　試金石といわれる異競技交流が本当に成功するか、全国のスポーツ関係者や行政などから注目を集めていることだけは間違いない。まだまだ手探りの状態だが、蒔いたタネが芽を吹き、大樹にしっかり育てることが大切だ。２クラブが加盟しているハンドボールが主導権を握って活性化に向かえば万々歳なのだが…。模索は続く。

寄稿

好きこそものの上手なれ

～ハンドボールを通して伝えたいこと～



青戸あかね
広島大学大学院教育学研究科
元日本女子代表

私がハンドボールに手を染めたのは遅く、山陽女子高校（広島）に入学してからでした。その後、東京女子体育大学、社会人ではイズミ（現広島メイプルレッズ）と計19年間、という長い選手生活を送りました。

高校、大学時代を通して日本代表として日の丸のユニフォームを着たことがなかった私は、日の丸のユニフォームに袖を通すことを目標に実業団チームでハンドボールを続ける決意をしました。

しかし、実業団での生活は大変辛く「1、2年で辞めるだろうな」と、考えていました。ただ、ハンドボールがだれよりも好きで「もう1年やってみよう」「もう1年やろう」と思い続けていたら、いつの間にか12年間が過ぎていました。このことは、今振り返っても、私自身が本当にびっくりしています。

現在は現役を退き、広島大学大学院（教育学研究科）でコーチング法を学んでいます。今までの生活がハンドボールを中心に回っていた私にとって、入学時は他の競技種目の先生方や、年下の同級生、学生たちと話をする毎日が驚きと発見の日々でした。でも、いつの間にか、そういった時間が毎日の生活リズムとなり、今では楽しくてたまりません。

また、伝統ある広島大学の男女ハンドボール部のコーチをさせていただき、学生とともに成長を実感できているし、充実した「学ぶ」喜びを与えてもらっています。

ハンドボールから離れられないのは、ハンドボールが好きというか、〝ハンドボールの虫〟という理由に他ならないです。

しかし、大好きなハンドボールから私は1度離れたことがありました。私は社会人として選手生活を12年間過ごしましたが、10年目に身体を患い、1度は「コートを去る」決意をしました。自分の弱さが改めて身にしみたし、１００パーセント納得してのことではなかったので、1年間は一人で泣き、自問自答を繰り返し、苦しい日々を送りました。

その時、元プロ野球選手の桑田真澄投手が大リーグに挑戦する特集番組をテレビで見ました。彼は、足首を怪我し、リハビリしながら夢に向かって頑張っている姿が、そこにはありました。それを見た私は「なぜ倒れるまで選手を続けなかったのだろう」と涙を流しながら、自戒の念にかられました。「まだ私はハンドボールの選手でいたかったんだ。ハンドボールとの縁は切れないんだ」と強く感じ、もう一度ハンドボールに私のすべてを賭けてみようと、心に強く誓いました。

次の年「お手伝いでいいからもう一度プレーしてみないか」と監督から話があり、即座に「やります。やりたいです」と言ったのです。まずは、お手伝いということだったのですが、プレーをやり始めたら、負けず嫌い精神が湧き出てきて「せっかく復帰するならプレーがしたい」との考えに変わっていきました。たまたまその年にチームメートが怪我をし、試合に出るチャンスに恵まれたのも、思い起こせばラッキーでした。

試合に出始めたら、大きな目標を掲げてプレーをしました。それは「日本代表に復帰したい」と心の奥底で思い、目標を立てました。しかし、その道との距離は遠く、なかなか招集されることはありませんでした。「人生甘くなかった」と悔しい思いの半面、挑戦する気持ちを忘れないでプレー出来ることですっきりし、心は晴れ晴れしていました。

そうした日々が続く中、チャンスは巡ってきました。北京オリンピック予選の再試合が行われることになったのです。「何かお手伝いができれば協力したい」と考えていた矢先でした。「守りを中心に日本代表に復帰をしてくれ」という話をいただきました。２００７年の暮れのことでした。

オリンピックへの夢は子どものころから持ち続けていました。だから、最後のチャンスに挑戦できる喜びを強く持ち、合宿を含め自分の力を出し切るプレーをすることができました。残念ながらオリンピックへの切符は最終予選においても取れませんでした。悔しい思いはありましたが、最後に挑戦するチャンスを与えてくださった方々への感謝の気持ちでいっぱいになりました。

「挑戦する」という気持ちはとても大切なことだと思います。先日、私は「挑戦する気持ちの大切さ」を子どもたちに伝える機会をいただきました。伝える難しさを改めて感じもしました。まだまだ勉強不足ですが、今持っている私の考えは伝わったのではないかと思います。

成功しても、失敗しても、諦めることなく〝挑戦〟しなければ結果はついてきません。〝挑戦〟し続けるからこそ、喜びが待っているのです。

好きなことをやるにあたっても、いつも笑顔とは限りません。でも、好きで続けることで、自分なりの道やゴールが見つかるのではないかと確信しています。「好きこそものの上手なれ」―この言葉を胸に刻み、今後の人生をハンドボールとともに歩み続けていく夢を描き続けたいと思います。

やはり、私はハンドボールを愛している人間だと、改めて思い知らされる昨今です。

平成 21 年 3 月 14 日・15 日の両日、駒澤大学において、第７回ハンドボールコーチング研究会が開催されました。本研究会は、全国指導者が自身の経験や・知見を持ち寄り、実際の現場で有用な情報を共有する機会として位置付けられています。

研究会の発表内容については、本誌で連載報告していただく運びとなりました。

今月は安達隆博さん（九州産業大学）の発表内容「NTS 男子優秀選手の体力測定結果」を報告させていただきます。なお、他の発表については次号以降で報告を連載いたします。

(財)日本ハンドボール協会指導委員会研究部会　舎利弗　学（学校法人松韻学園福島高等学校）

NTS男子優秀選手の体力測定結果

○安達隆博（九州産業大学）　斉藤慎太郎（大同工業大学）
白井克佳　小笠原一生（国立スポーツ科学センター）　栗山雅倫（東海大学）　田中　守（福岡大学）

キーワード：ハンドボール、NTS、体力テスト

はじめに

2000 年よりスタートしたナショナルトレーニングシステム（NTS）では、各種体力測定を行ってきており、それをもとに NTS 推薦の体力評価基準も作成されてきた。2005 年度からは、ハンドボールの特性を考慮した専門的体力の評価が必要であるという理由から新しい項目を追加した体力測定が実施されている。本研究では、2005 年度から 2008 年度までに NTS センタートレーニングで行った体力測定の結果をまとめ、第 19 回世界学生選手権大会に出場した選手を含む男子 U24 代表候補 18 名の体力測定結果と比較しその特徴を明らかにすること、また、2005 年度に U15 として参加した 9 名の男子選手が 2008 年度にも U18 として参加していたので、彼らの体力変化も明らかにすることを目的とした。

方　法

1．対象者

対象者は、2005 年度～ 2008 年度 NTS センタートレーニングに参加した高校生（U18）男子 114 名であった。

2．測定項目

・形態　身長・体重・指高・指極

・無気的パワー

走パワー：30m 直線走、30m 方向変換走

跳パワー：立ち３段跳び

投パワー：長座ハンドボール投げ

・筋力　握力・メディシンボール後方投げ（4kg を使用した）

30m 方向変換走の測定値を 30m 直線走の測定値で除した値を方向変換能力として評価した。また、2006 年度は、走パワーおよびメディシンボール後方投げの測定はできなかったためその項目に関しては 2006 年度の 27 名を除いた 87 名の結果を用いた。

結果と考察

表 1 に示すように、U18 の身長は 181.2 ± 5.7cm、体重は 77.6 ± 9.2 kgであった。2005 年以降、ルーマニアの Ioan Kunst 氏提唱のジュニア選抜の身体的モデルに近い選手が選抜されている傾向にある。今後は、ポジション別の形態も考察していきたいと考える。表 2 では、無気的パワーの結果を示した。U18 の走パワーは、U24 と比較して有意に低い値であったが、跳パワーおよび投パワーは U24 と差がないことが明らかにな

った。U18は、跳パワーおよび投パワーには優れているが、方向変換を含めた走パワーの強化が必要であることが示唆される。表3では、筋力の測定値を示した。U18はU24と比較して大きく差があり筋力についても今後さらに強化が必要なことが示された。

表4～6では、2005年度および2008年度の両方に選抜された9名の測定値を示した。走パワーと投パワーには変化がみられなかった。投パワーはU24の測定値と比較しても差がなかったことから、他のU18と同様に走パワー、特に方向変換を考慮した走能力の強化が必要であると思われる。

表1. U18とU24の形態の比較

	身長(cm)		体重(kg)		指高(cm)		指極(cm)	
	U18	U24	U18	U24	U18	U24	U18	U24
平均値	181.2	185.1**	77.6	85.4**	232.9	241.3***	187.2	191.8
標準偏差	5.7	6.2	9.2	11.4	7.6	8.2	14.9	7.2
最高値	194.5	193.5	102.3	113.9	251	252	291	204

U18vsU23 **p<0.01 ***p<0.001

表2. U18とU24の無気的パワーの比較

	30m走(s)		30m方向変換走(s)		方向変換能力		立三段跳び(cm)		長座投げ(m)	
	U18	U24	U18	U24	U18	U24	U18	U24	U18	U24
平均値	4.39	4.25**	7.01	6.53***	1.59	1.54**	744.0	749.8	27.1	27.1
標準偏差	0.16	0.32	0.26	0.31	0.06	0.11	56.8	60.3	3.1	3.5
最高値	3.90	3.91	6.43	5.97	1.46	1.35	905	900	36	32

U18vsU23 **p<0.01 ***p<0.001

表3. U18とU24の筋力の比較

	平均握力(kg)		MB投げ(cm)	
	U18	U24	U18	U24
平均値	43.6	59.1***	1084.3	1217.2*
標準偏差	18.3	5.8	214.7	152.9
最高値	73.05	68.5	1870	1530

U18vsU23 *p<0.05 ***p<0.001

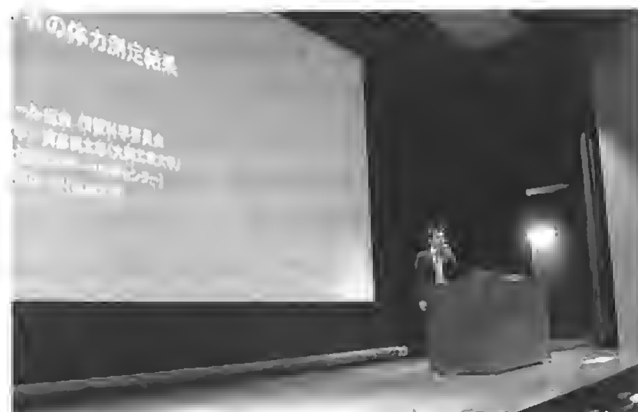


表4. U18(9名)形態の比較

n=9	身　長(cm)		体　重(kg)		指　高(cm)		指　極(cm)	
	2005	2008	2005	2008	2005	2008	2005	2008
平均値	179.0	180.8**	73.0	79.2***	230.8	232.0	183.0	186.9*
標準偏差	5.9	6.3	7.8	9.1	7.2	8.0	6.4	7.1
最高値	185.4	187	89.3	98.3	239	240	189	197

2005vs2008 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

表5. U18(9名)無気的パワーの比較

n=9	30m走(s)		30m方向変換走(s)		方向変換能力		立三段跳び(cm)		長座HB投げ(m)	
	2005	2008	2005	2008	2005	2008	2005	2008	2005	2008
平均値	4.44	4.29	7.17	7.00	1.62	1.63	726.9	781.1***	26.8	28.3
標準偏差	0.21	0.17	0.18	0.21	0.10	0.10	52.6	74.9	3.3	2.9
最高値	4.13	3.98	6.96	6.72	1.49	1.54	813	905	31.2	33.4

2005vs2008 ***p<0.001

表6. U18(9名)筋力の比較

n=9	平均握力(kg)		MB投げ(cm)	
	2005	2008	2005	2008
平均値	46.1	56**	777.4	1202.6***
標準偏差	2.8	5.8	101.2	179.8
最高値	49.4	64	922	1564

2005vs2008 **p<0.01 ***p<0.001

平成21年度 JHAレフェリーコース前期を終えて

(財) 日本ハンドボール協会審判委員会 審査指導専門委員会 委員長 越田 義昭

JHA レフェリーコースは、国際レフェリーの育成を目的として30余年前に創設され、長い歳月をかけて幾多の秀逸な若手レフェリーを輩出してきた。今年も若干名ながら本コースを修了した20代前半のレフェリーが全日本大会にノミネートされており、彼らの今後の活躍に大いなる期待を寄せている。

さて、参加資格年齢が16～22歳に変更されて4期目となる本年は8名の参加者を迎え、例年どおり前期のスケジュールを終えた（詳細は後述）。近年は女性レフェリーの参加者も散見されるようになってきたが、女子高校生（16歳）2名が参加するのは史上初のことであり、まさに特筆に値するニュースである。本コース前期の実技指導の場として借りているのは高校生の大会であり、高校生の試合を高校生レフェリーが担当することになったわけであるが、男女チームの指導者やプレーヤーは彼女たちの登場に驚きつつも、その真摯な態度と判定に敬意を払ってくれていた。また、この8名からなる「レフェリーチーム」の一員としても高校生ながら役割をしっかりと果たしていた。

指導内容に対する迅速な吸収力や柔軟な思考力は（個人差はあるものの）その若さに起因するところが大きい、これは本コースの受講生を指導して感じることである。吸収力や思考力が高ければ、それだけ多くのことを短期間で修得でき、レフェリーにとって最も大切な能力、つまり「両チームのプレーヤーの競技力を充分に発揮させる」能力や「競技を円滑に進めていく」能力を培うための時間を存分に充当することができる。是非とも、全国の高校生諸君もレフェリーの基本的なトレーニングを積んで本コースにチャレンジし、国際レフェリーを目指していただきたい。

本コースは今日までに運営方法や参加資格に若干の変更があったものの、所期の目的を達するためのエリートコースとして中心的な役割を担ってきた。今後は、国際ハンドボール連盟の推進している若手レフェリー育成システムにノミネートされる人材を育成するため、本コースをヤングレフェリープロジェクトと有機的に結合させて初期教育の充実を図るとともに、修了後教育も含めて大きく発展させていかなければならないと考えている。

平成21年度レフェリーコース前期研修会［実施要項］

【期日】
平成21年8月15日（土）～17日（月）

【会場】
講義及び宿舎：彦根ステーションホテル
実技：滋賀県立長浜ドーム

【受講生】
伊藤悠人（栃木県・大学生18歳）
遠藤楓馬（栃木県・大学生18歳）
鈴木孝明（愛知県・大学生23歳）
森裕太（岐阜県・大学院生22歳）
青山朋弘（東京都・大学生21歳）
清田紘平（神奈川県・大学生20歳）
栗田宝末（愛知県・高校生17歳）
深津美亜（愛知県・高校生16歳）

【講師】
越田義昭審査委員長
植村彰審査委員
岸本光夫審査委員
家永昌樹国際審判員

【日程及び時程】

■8月15日（土）

	ホテル集合	12：30
	出欠点呼	12：55
	開講式	13：00
	開講挨拶	
	日本ハンドボール協会審判委員長挨拶	
	講師紹介	
	受講者自己紹介	
	研修内容説明	13：20
講義	1．世界のハンドボール界の現状	13：30～13：50
	2．レフェリーとして必要なこと	14：00～14：30
	3．審判とは…国際大会体験談	14：40～16：10
	4．ルール解説	16：20～17：30
	5．ルールテスト及び解説	19：30～22：00

■8月16日（日）

実技	時程 ゲーム吹笛及び観戦	9：00～16：45
	ミーティング（会場）	16：55～17：15
講義	ゲームの反省とルールテスト及び解説	19：30～22：00

■8月17日（月）

実技	時程 ゲーム吹笛及び観戦	9：00～14：00
講義	ゲームの反省	14：10～14：40
閉講式		14：45～15：00
解散		15：00



オリンピックの舞台へ

愛知県立知立東高等学校２年　深津美亜・栗田宝末

私たちは、プレーの発展と向上のためにレフェリーを始めました。私たちのチームは笛を持つこともトレーニングの一つとして取り組んでいます。違った角度からプレーを見て考え、少しでも上達できるようにするために、部員全員で競技規則問題集を使ってルールの勉強をしたり、練習試合などでレフェリーをしたり、ビデオを見てミーティングをしてきました。レフェリーを始めたことで試合の見方が変わり、より一つ一つのプレーを分析しながら見られるようになってきました。そして、練習でも試合でも一つ一つ考えて意図を持ったプレーをするように全員の取り組みが変わってきています。また、考えることは、パワーやスピードの不足をカバーし、地区大会ベスト４から県大会出場の原動力になっています。

その中で私たちは去年（１年生）の夏、地区大会でレフェリーをする機会に恵まれ、グリーンワッペンをつけ、初めて公式試合を吹きました。一緒にペアを組んだ先生方にまず言われたのは、大きく笛を吹くことでした。実際やってみると、全く笛が吹けませんでした。それはボールばかり目で追ってしまい、プレーの予測ができていないからでした。レフェリーとプレーヤーには共通するところがあることを実感しました。

１月に私たちはＤ級申請をし、レフェリーの一員となりました。手帳が送られてきたときは、「この手帳が全部埋まるくらいたくさんの試合を吹いてみたい」と思いました。

そして、もっと上手く笛を吹けるようになりたいという思いから、今年の夏休みに２泊３日のJHAレフェリーコースに参加しました。参加したのは６人の大学生の方と私たち高校生２人の８人でした。

講習会では、「世界のハンドボール界の現状」や「ヤングレフェリーの育成」、「レフェリーとしての心構え」を学びました。以前、「中東の笛」のことが話題になり、少しは中東国のことを知っていましたが、今回もっと掘り下げた内容を知ることができました。また、国際レフェリーは国際情勢を知っておかなければならないということも教えていただきました。そして「笛は人格だ」と言われ、プレーヤーに分かりやすく吹こうと思いました。自分たちの知らなかった世界を知りました。

実技では各地からたくさんのチームが長浜ドームに集まり、その試合を吹かせていただきました。他のメンバーがレフェリーをしているのをメモしたりして、自分たちの動きとの違いを見ました。そして夜の研修会ではメモをした内容をお互いに伝えあったり、競技規則試験問題を解いたり、全員で実技のとき起こったプレーを分析しました。いろんなアドバイスをいただき、自分たちの未熟さを感じました。

後期のレフェリーコースでは今回よりもレベルアップして臨みたいと思います。

８月下旬にはNTSに参加しました。私たちと同じ高校生のトップが集まった中でさまざまなプレーを見ることができました。私たちはレフェリーとしてだけでなく、現役のプレーヤーとして、自分たちのプレーに生かせるところを考えながら見ていました。同世代トップのプレーを見極めることは、とても刺激的でした。高いレベルで受けたアドバイスは的確で、また多くのことを学ぶことができました。

現在、東海学生秋季リーグで大学生の試合のレフェリーをやらせていただいています。自分より年上の方の試合を吹くのは難しいですが、この機会を大切にして精進していけるようにしたいと思っています。

現在、ハンドボール界では若い人材が必要とされています。今が私たちにとって最大のチャンスです。これを逃さないように、私たちを支えてくださっている多くの方への感謝の気持ちを忘れず、少しでも上手くなって上を目指したいです。

目指すはオリンピック！

強い気持ちを持ち、これからも頑張り続けますので、よろしくお願いします。

スコアルーム① 第44回全国高等専門学校大会

開催期日：2009年8月21日(金)～22日(土)
会　場：熊本県・八代市総合体育館、宇城市松橋総合体育センター

▼予選リーグ第1ブロック

函館高専 20（7－5、13－10）15 富山高専
函館高専 30（16－4、14－14）18 高松高専
富山高専 25（12－13、13－8）21 高松高専

▼予選リーグ第2ブロック

宇部高専 21（11－8、10－8）16 熊本電波高専
宇部高専 23（10－6、13－13）19 豊田高専
熊本電波高専 24（14－8、10－13）21 豊田高専

▼予選リーグ第3ブロック

八代高専 37（17－8、20－9）17 八戸高専
八代高専 37（12－8、25－6）14 長岡高専
八戸高専 29（16－11、13－13）24 長岡高専

▼予選リーグ第4ブロック

北九州高専 34（20－15、14－11）26 一関高専
北九州高専 18（6－10、12－8）18 明石高専
一関高専 25（15－13、10－7）20 明石高専

▼準決勝

八代高専 26（9－9、17－6）15 北九州高専
函館高専 19（8－6、11－5）11 宇部高専

▼決勝戦

八代高専 22（11－7、11－11）18 函館高専

スコアルーム② 第38回全国中学校大会

開催期日：2009年8月23日(日)～25日(火)
会　場：宮崎県・宮崎市総合体育館ほか

【男子】

▼1回戦

岩国(山口) 28（12－4、16－13）17 大体大附(大阪)
滝尾(大分) 26（13－12、13－11）23 培良(京都)
朝明(三重) 29（17－15、12－13）28 あきる野西(東京)
氷見南部(富山) 31（14－16、17－14）30 葛西第三(東京)

▼2回戦

三松(宮崎) 35（13－5、22－9）14 郡山第一(福島)
岩国(山口) 29（14－11、15－13）24 富岡南(群馬)
香川第一(香川) 31（13－19、18－10）29 朝明(三重)
浦西(沖縄) 36（19－6、17－19）25 厚別(北海道)
住吉(山口) 28（17－15、11－11）26 平針(愛知)
はとり(愛知) 26（15－8、11－12）20 井吹台(兵庫)
明倫(福井) 32（16－5、16－14）19 滝尾(大分)
神埼(佐賀) 29（14－9、15－15）24 氷見南部(富山)

▼3回戦

三松(宮崎) 38（18－12、20－14）26 香川第一(香川)
岩国(山口) 31（18－14、13－15）29 浦西(沖縄)
明倫(福井) 28（17－9、11－15）24 住吉(山口)
はとり(愛知) 28（13－14、15－9）23 神埼(佐賀)

▼準決勝

明倫(福井) 34（15－9、19－18）27 三松(宮崎)
はとり(愛知) 33（16－11、17－17）28 岩国(山口)

▼決勝

はとり(愛知) 20（9－11、11－8）19 明倫(福井)

【女子】

▼1回戦

氷見北部(富山) 31（15－8、16－12）20 羽島(岐阜)
大瀬(奈良) 20（11－11、9－7）18 鬼怒(茨城)
大住(京都) 17（10－5、7－11）16 三郷北(埼玉)
香川第一(香川) 20（12－4、8－9）13 松橋(熊本)

▼2回戦

久保(山口) 20（12－6、8－10）16 浦西(沖縄)
岩国(山口) 19（12－5、7－5）10 中山(岐阜)
三松(宮崎) 16（12－7、4－7）14 本通(北海道)
光陽(福井) 27（14－9、13－5）14 笹川(三重)
氷見北部(富山) 27（13－7、14－10）17 培良(京都)
神森(沖縄) 31（21－8、10－7）15 大瀬(奈良)
大住(京都) 34（21－6、13－6）12 松園(岩手)
東久留米西(東京) 20（7－10、13－8）18 香川第一(香川)

▼3回戦

氷見北部(富山) 28（9－11、19－9）20 久保(山口)
大住(京都) 30（16－6、14－4）10 三松(宮崎)
神森(沖縄) 27（12－11、15－11）22 岩国(山口)
光陽(福井) 26（15－3、11－10）13 東久留米西(東京)

▼準決勝

大住(京都) 21（12－11、9－9）20 氷見北部(富山)
光陽(福井) 22（11－9、11－7）16 神森(沖縄)

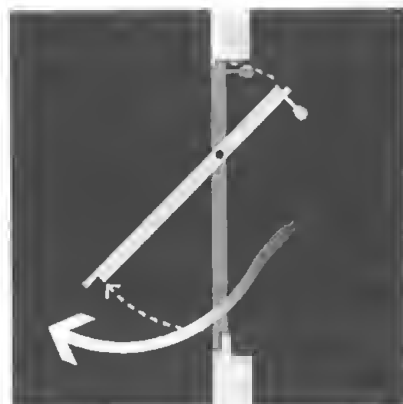
▼決勝

光陽(福井) 30（16－9、14－9）18 大住(京都)

呼吸する建築

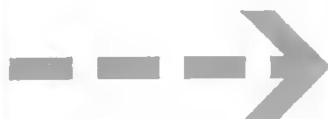


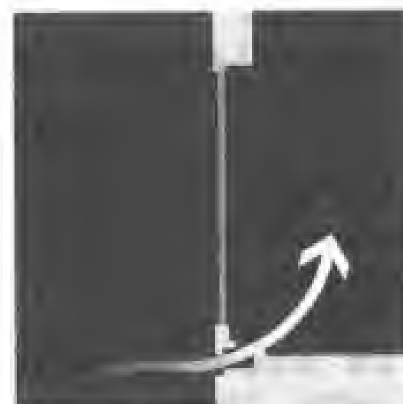




Swindow　スウィンドウ
わずかな風圧も捉えて自然に開閉し、室内外の温度差で効率の良い換気が行えるバランス式逆流防止窓。



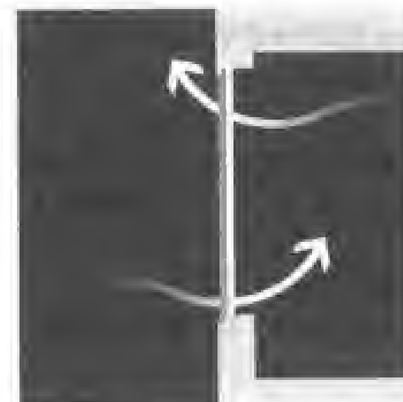




Wincon　ウィンコン
内蔵の調節弁により、風の強弱に影響を受けにくく、定風量で換気が行えるヨコ型定風量換気スリット。







Cavcon　キャブコン
内蔵の調節弁により、強風時でも一定の風量で換気ができ、無風時でも内外の温度差による重力換気が行えるタテ型定風量換気スリット。

NAV WINDOW 21

「呼吸する建築」。それは人が呼吸をするように
建築が自然に空気を取り入れ、建物内部の空気を新鮮に保ち
不要なものを排出するシステムを持つことです。
自然換気システム＝NAV WINDOW 21は
これまでの建築の機械空調と共存し
建物を取り囲む風を読み、建物内に風の道を作りそれを状況の変化に
あわせて制御する画期的な換気システムです。

三協立山アルミ株式会社
東京本社／〒164-8503 東京都中野区中央1-38-1
住友中野坂上ビル20F〈環境商品部〉 TEL (03) 5348-0367
インターネットホームページ　http://buildingsash.net/

がんばれハンドボール10万人会「サポート会員」9月入会・継続会員

【埼　玉】田中　孝　【東　京】平賀　とみ子、床尾　佳剛　【神奈川】田中　さよ子、種村　明彦
【新　潟】石田　靖晶　【愛　知】禰津　行雄、田中　基明、西　みどり、小林　勇、牧野　千別
【大　阪】伊藤　慎吾、塩川　正十郎　【島　根】森江　和吉　【広　島】山手　文雄、青戸　克好
【福　岡】安河内　正路

【11月の行事予定】

【会　議】

11月14日(土)　第２回理事会(東　京)

【大　会】

11月７日(土)～11日(水)
高松宮記念杯男子52回・
女子45回全日本学生選手権大会(石川県・金沢市)
11月21日(土)～22日(日)
第7回車椅子競技大会(和歌山県・和歌山市)

【お 詫 び】

前号の10月号の20ページに掲載されました「フリースロー」の記事ですが、誤って９月号の記事を再び掲載してしまいました。読者各位には誠に申し訳ございませんでした。今後はこのようなミスを起こさないよう、十分なチェック体制をもって機関誌の発行に当たってまいります。

HANDBALL CONTENTS Nov.

（登録チームの購読料は登録料に含む）

(財)日本ハンドボール協会編 『ハンドボール』第五〇五号

昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可

平成二十一年十月二十六日印刷 平成二十一年十一月一日発行

東京都渋谷区神南一—一—一 電話 代表〇三—三四八一—二三六一 振替 〇〇一二〇—七—一〇二九三

編集兼発行人 川上憲太

定価 年間三三〇〇円